

教授 豊田 和子

教育上の能力に関する事項	年 月 日	概 要
◎教育方法の実践例 視聴覚教材の活用によるアクティブラーニング	2016年度前期	「保育者論」の授業では、保育園・幼稚園の先生の仕事を学ぶため、DVDによる学習を取り入れ、臨場感を持つ授業工夫をした。保育の場面の記録などを討論するアクティブラーニングの教育方法を試みた。
ワークシートによる授業工夫	2016年度後期	「保育原理」の授業では、毎回、ワークシートを配布して、そこに学生の学びや理解、考えたことなどを記録させ、授業後に回収して、次回までに赤ペンを入れて返却した。
◎当該教員の教育上の能力に関する大学の評価	2017年度 3月	後期担当授業の学生アンケートでは、以下のような評価だった。「保育者論」では、3.8点で、学生からは「わかりやすい授業であった」「興味を持った」という評価を得た。

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
◎学術論文 幼小接続カリキュラムの視点から野村芳兵衛（1896～1982）を読み解く―「遊び」と「学習」を中心に―	単著	2017. 3	名古屋芸術大学研究紀要第38巻	現在課題となっている幼小接続の在り方について考察するために、児童の村小の生活教育論の実践家として著名な野村芳兵衛の著作から、「遊び」と「学習」について論じているものを解説した。野村は、子どもの教育には「育つ教育」と「育てる教育」があることを示し、とりわけ「育つ教育」には、子どもの生命・生活の原理が有効であるとして、学校教育に「遊び」を位置づけることを提唱した。氏の主張は、遊びと学習は、子どもにとって分けられるものではなく、その両方がカリキュラムとして重要であるという立場を示した。本論では、このような幼小接続のカリキュラム観にたつ野村が提示した指導計画にも触れ、幼児期と小学校教育の連続性、接続のカリキュラム構築の課題にとって、野村の主張から学びなおす意義がある、と述べた。 pp. 201-215

<p>中堅保育者による自己認識と保育実践力を高めるための課題についての考察—中堅後期（11～14年経験）保育者へのアンケート調査から—</p>	<p>単著</p>	<p>2017. 3</p>	<p>名古屋芸術大学教職センター紀要 第5号</p>	<p>保育者の専門性や資質向上が課題となっている現状の割には、現職保育者を対象とした自己認識・自己課題をテーマとした先行研究が少ないことから、本稿では、現職の中堅後期保育者（11～14年経験者）を対象としたアンケート結果から考察をした。中堅後期保育者の自己認識としては、「直接的な保育実践力関する」自信は大きい（52.8%）、「保護者対応」（30.2%）で、逆に「職場の人間関係」（17.0%）と低いことが分かった。悩みや困りごとに関しては、「後輩保育者への指導助言」（32.2%）、「職場のチームワーク」（25.8%）、「中堅のマナー化」（24.2%）であった。特に、後輩保育士への助言が伝わらないという悩みを多くの保育者が持っていることが判明した。 pp. 29-41.</p>
<p>（その他） 戦前戦後の幼児教育・保育に関する実証的研究（1）—幼稚園の事例から—</p>	<p>共著</p>	<p>2016. 8</p>	<p>日本教育学会大70回大会発表論集</p>	<p>科研（15K04334）助成を受けて行った実証的研究の「幼稚園」における実際をまとめて発表した。堅磐信誠幼稚園（名古屋市）、小倉幼稚園（小倉市）、小川幼稚園（京都市）の3園から得られた当時の保育資料を分析した。分析項目は、行事、保育内容、保育者の思い、研修、子どもの生活などで、戦前と戦後の共通点・相違点を明らかにした。特に、昭和19年・20年になると幼稚園教育に戦時色が強く表れていることが、保育の記録から明らかになった。 （共著者：清原みさ子・寺部直子・榊原菜々枝） pp. 37-38.</p>